

色内銀行街

色内通りとの交差点からの日銀通り沿いの眺めは近代都市の歴史を物語っています。半径約 500 メートルの範囲にある小樽を北の経済中心地に仕上げた名門銀行の建物群は日本の近代建築の粋を集めています。当時の 25 の銀行の建物のうち 10 棟が残っており、そのいくつかは 20 世紀初頭の日本の一流建築家によって設計されました。

最初の銀行と倉庫は南小樽周辺に設立されましたが、1881 年にこの地域が火災でほぼ完全に焼失した後、商業の中心地は北の色内地区に移転され現在に至っています。この地区は 19 世紀後半から 20 世紀半ばまでの銀行や商社が立ち並ぶ近代建築の博物館のような場所です。

銀行は、富、誠実さ、安定性を表現するために古典的な建築様式を採用しました。建築家たちはヨーロッパとアメリカにインスピレーションを求めました。日本銀行小樽支店（1912 年）は辰野金吾（1854 年 -1919 年）と彼の弟子である長野宇平次（1867 年-1937 年）によってルネサンス リバイバル様式で設計されました。装飾的な石積みや塔などのバロック様式の要素が組み込まれています。三井銀行小樽支店（1927 年）は曽禰達蔵（1853 年-1937 年）によってよりシンプルなイタリア ルネサンス リバイバル様式で設計されました。

20 世紀半ば、この国のエネルギー需要の主流が石炭から石油へ移行するにつれて小樽の財政力は低下し、小樽は主要な石炭積出港としての地位を失いました。多くの銀行が小樽から撤退し、その荘厳な建物は博物館やその他の施設として改修されるまで空き家でした。